青年期における対人恐怖心性と自己関係づけの関連

清　水　健　司

The relationship between anthropophobic tendency and self-reference in adolescence

Kenji SHIMIZU

キーワード：対人恐怖心性，自己関係づけ，青年期

要　　約

本研究は，青年期における対人恐怖心性と自己関係づけについて探索的検討を行ったものである。大学生305名を対象とした質問紙調査を行い，測定尺度として対人恐怖心性，自己関係づけ，自意識，基本的信頼感，社会志向性・個人志向性を用いた。対人恐怖心性と自己関係づけを投入したクラスター分析から4クラスターを抽出し，各々について自意識・適応性の観点から詳細な内容の検討を行った。

第1クラスターは，対人恐怖心性・自己関係づけが低く，高い適応性を特徴として自己中心的な特性も持つことが推測された。第2クラスターは，対人恐怖心性・自己関係づけが共に高く，典型的な未熟性を示していた。第3クラスターは，対他的不安意識は高いが自己関係づけが低く，“ふれあい恐怖”に類似する群であると解釈された。第4クラスターは，対他的不安意識は低いが自己関係づけが高く，自己を防衛するために集団の中で同調しており，表面的には安定しているものの他者行動に対して敏感であることが示唆された。

序　　論

対人恐怖は，他者からの批判や嘲笑を恐れて社会的状況を回避する特徴を有し，笠原（1972）によると“他人と同席する場面で不当に強い不安と精神的緊張が生じ，そのため，他人に軽蔑されるのではないか，不快な感じを与えるのではないか，嫌がられるのではないかと案じて，対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型”と定義されている。これは，DSM-Ⅳ-TR（APA，2000）の社会恐怖（Social Phobia）にて“日本などにおける文化特異的な特徴”として記述され，本邦では日常的に使用される馴染み深い用語としても知られている。本概念は非常に幅広い範囲を網羅するもので，赤面恐怖・視線恐怖・表情恐怖・体臭恐怖・醜形恐怖等の対人状況下における症状内容の総称として扱われてきた。また，実証研究領域においては，一般健常者に認められる人見知りや過度の気遣い，対人緊張

などを指す対人恐怖心性（永井，1994；堀井・小川，1997b）から多くの示唆が得られており，青年期心性の普遍的特性として多面的なアプローチがなされている。

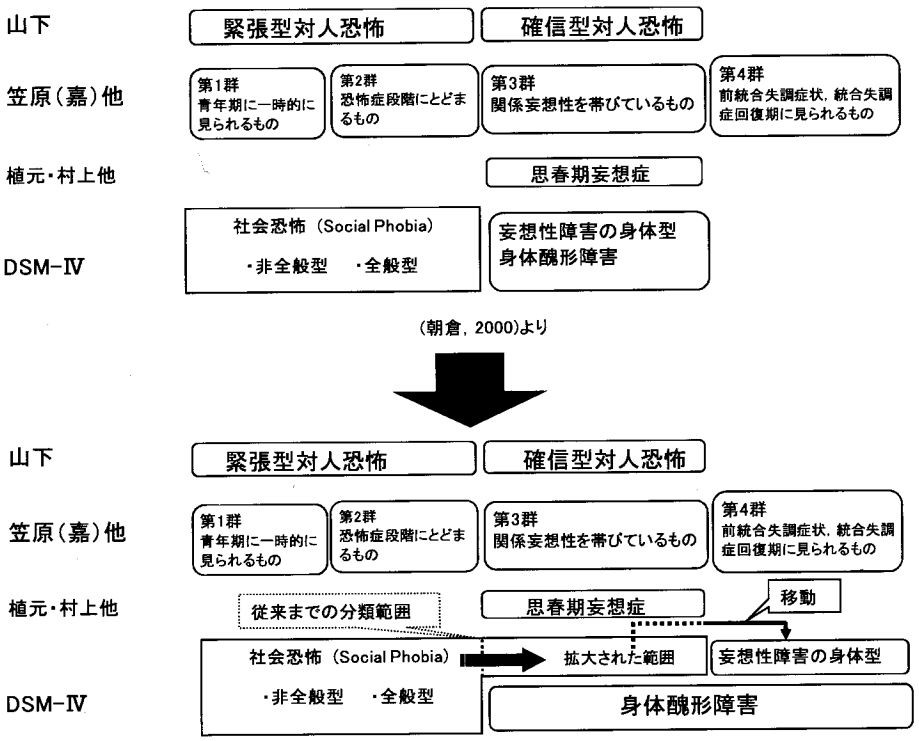
また測定尺度としては，本邦における永井（1994）や堀井・小川（1997b）による対人恐怖心性尺度があり，海外では，Leary（1983）の Interaction Anxiousness Scale（IAS）や Mattick & Clarke（1998）の Social Phobia Scale（SPS）と Social Interaction Anxiety Scale（SIAS）が代表的なものとなっている。そして，対人恐怖心性を中心主題に据えた研究では清水（2001）の孤独感との関連，清水・海塚（2002）の自己愛傾向との関連，清水・川邊・海塚（2005）の第2の分離個体化との関連性が検討されたものがある。これら多くの比較検討の結果から，対人恐怖心性は青年期の一般特徴として様々な解釈が展開されている。しかし，青年期と深い関わりを持つと考えられる重要概念は他にも数多く存在しており，そのなかの一つには妄想的観念を挙げることができる。

妄想とはDSM-Ⅳ-TR（APA，2000）にて“外的現実に対する間違った推論に基づく誤った確信であり，その矛盾を他の殆どの人が確信しており，矛盾に対して反論の余地のない明らかな証明や証拠があるにもかかわらず，強固に維持されるもの”と記述され，統合失調症や妄想性障害などの精神病理における重要指標とされている。また，近年ではこのような精神病理水準には至らない，健常者が報告する妄想類似体験である妄想的観念の実証研究が散見されている（Fenigstein & Vanable，1992；金子，2000；丹野・石垣・杉浦，2000；森本・丹野・坂本・石垣，2002；森本・丹野，2004）。

例えば，丹野・石垣・杉浦（2000）では正の感情価，負の感情価の8主題からなる妄想的観念尺度が作成され，健常者でも高頻度にて妄想的体験が見られる状況が示唆されている。また，金子（2000）では，他者の何でもない仕草を自己に対して被害的に関連づける，被害妄想観念に特化した自己関係づけ尺度が作成されている。このように，妄想的観念にも測定可能な青年期心性としての位置づけが存在し，有用な測定尺度にも様々なものがある。

この対人恐怖心性と妄想的観念の関連性を考える中で，前者の特徴である他者から否定的に評価されることを強く恐れる現象には，後者の特徴である本来は何でもない他者行動であるにも関わらず，それを自己に向けられた否定的視線の証左とする偏った信念が基礎になることは容易に予測される。また，その逆方向の関連性も十分に想定されうることを考えると，両概念には密接な関連が推測される。例えば，笠原（2005）では，臨床的観点から対人恐怖と妄想の関連性に触れる提言がなされている。そのなかでは，対人恐怖の概念がその幅広さ故に拡大される傾向の中で，現状では様々な立場からの定義が必ずしも一致しない点が指摘されている。そこで笠原（2005）は周辺領域病態との相違点の明確化のため Figure 1に見られる新たな対人恐怖の分類方法を提示した。

Figure 1によると，従来の朝倉（2000）の分類方法ではDSM-Ⅳの社会恐怖は，上部1段目に記載される小心で人前での強い緊張を主症状とする“緊張型対人恐怖”と上部2段目に記載される第1群・第2群に相当していた。しかし，笠原（2005）による新たな分類方法では，周囲の何気ない仕草を自分の欠点と結びつけるとの関係念慮を症状に含む下部1段目の“確信型対人恐怖”と下部2段目の第3群も社会恐怖の範疇に含まれることになる。これは，笠原（2005）にて拡大された部分にもともと布置されていた妄想性障害が第3群ではなく，第4群に相当するものとして再考された点によるものである。これは，確信型対人恐怖



における妄想的観念が，ある特定の時間・場面で強い症状を示す“状況依存性”が認められる点や，了解可能な範囲としての“自分の存在のために他人に迷惑をかけてしまう”との加害恐怖性や“周囲の人が自分を嫌がって避けている”との関係念慮性は社会恐怖の二次的随伴症状であると判断された点において，明らかな精神病圏にある妄想性障害とは本質的に区別されるのが妥当（笠原，2005）との主張に由来するものである。

これは，現在も継続される対人恐怖と社会恐怖の概念の摺り合せ作業において妄想的観念の重症度（軽症ならば確信型対人恐怖，重症ならば妄想性障害に分類）に留意しながら，対人恐怖に見られる関係念慮性を一考する必要性を示唆するものとも言える。

実証的観点において対人恐怖心性と妄想的観念の関連を扱った貴重な研究を俯瞰すると永井（1994）では，対人恐怖心性の下位尺度である関係的自己意識において妄想的観念に類似した項目が含まれている。また，金子・本城・高村（2003）では，抑うつ・登校拒否傾向と，対人恐怖心性および自己関係づけの相関関係が示されている。しかし，対人恐怖心性や妄想的観念を個別主題とした報告数に比較すると直接的に両特性を取り扱った研究は非常に希少であり，体系的に把握されてきたとは言い難い面も見受けられる。

そこで，本研究では永井（1994）や金子他（2003）の知見を補完する意味にて，対人恐怖心性と妄想的観念の関係性を実証的に検討することを目的とする。まず，対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1997b）と自己関係づけ尺度（金子他，2003）を用い，対人恐怖心性と妄想的観念が実際の一般青年において，どのようなバランスを保持しながら存在しているのかに

ついて探索的検討を行う。そして，その対人恐怖心性と妄想的観念のバランス関係が，青年の自意識・適応状態にどのような差異を見せるのかについても言及する。

本研究では対人恐怖心性と妄想的観念を中心に扱うことから，対人関係場面で不安を感じ，他者行動に対して自己の被害的認知を強める要因には，他者からの視点や自己に向ける視点が意識されやすいことが考えられるため，公的自意識と私的自意識を扱う。

そして，青年の社会生活における適応状態を詳細に把握するため，青年における適応の根幹とも換言可能な基本的信頼感と対人的信頼感を扱う。また，これらの土台上に積み重ねられる適応性として，青年の自己の在り方を最大限に発揮する内的適応を指す個人志向性と，社会的期待や社会規範にうまく適応してゆく過程を指す社会志向性を扱う。

方　法

質問紙の構成

1．基本的属性要因：年齢・性別について記入を求めた。
2．対人恐怖心性尺度：堀井・小川（1997b）によるものを使用した。30項目について“全然当てはまらない”から“非常に当てはまる”の7段階で評定を求めた。
3．自己関係づけ尺度：一般青年に見られる被害妄想的な思考を測定するため，金子他（2003）によるものを使用した。12項目について“当てはまらない”から“当てはまる”の5段階で評定を求めた。
4．自意識尺度：自分自身にどの程度注意を向けやすいかとの特性を測定するため，菅原（1984）によるものを使用した。21項目について“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”の7段階で評定を求めた。
5．基本的信頼感尺度：青年期の重要な発達課題であるアイデンティティ感覚の形成などにおいて主要な役割を果たす基本的信頼感を測定するため，谷（1996；1998）によるものを使用した。11項目について“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”の7段階で評定を求めた。
6．個人志向性・社会志向性尺度：青年の内的・外的な適応性を測定するため，伊藤（1993）によるものを使用した。17項目について“当てはまらない”から“当てはまる”の5段階で評定を求めた。

調査協力者

H県内の大学に通う大学生及び専門学校生である305名（男性：121名　女性：184名）を調査協力者とし，授業時間を使用させてもらって集団・無記名にて行った。回答所要時間は20分程度であり，調査協力者全体の平均年齢は19.4歳（SD＝1.40歳）であった。

結　果

各測定尺度についての検討

まず，対人恐怖心性尺度に対して因子分析（主因子解－Promax 回転）を行った結果，固

有値の減衰状況から5因子解を最適解とした。その結果，第1因子<集団に溶け込めない>，第2因子<目が気になる>，第3因子<生きることに疲れている>，第4因子<自分を統制できない>，第5因子<自分や他人が気になる>を抽出した。この対人恐怖心性の各因子の扱い方について堀井・小川（1997a）は，青年期後期にあたる大学生では他者との関わりから生ずる対他的不安意識と自らの存在から生ずる対自的不安意識が明確に分化するため，“対自的側面”と“対他的側面”に分けて検討する必要性を示唆している。

本研究においては，この知見を参照することとし，対人恐怖心性を対他的不安意識（第1因子<集団に溶け込めない>・第2因子<目が気になる>の2因子の下位尺度合計得点）と対自的不安意識（第3因子<生きることに疲れている>・第4因子<自分を統制できない>・第5因子<自分や他人が気になる>の3因子の下位尺度合計得点）の2変数から分析を進めることとした。α係数は順に，.94，.88であった。

そして，自己関係づけ尺度に対して因子分析（主因子解－Promax回転）を行った結果，先行研究と同様に1次元構造を示したため（金子，2000；金子他，2003），以下の分析では全項目合計得点を使用した。α係数は.92であった。また，自意識尺度に対して因子分析（主因子解－Promax回転）を行った結果，固有値の減衰状況から2因子解を最適解とし，公的自意識と私的自意識を抽出した（菅原，1984）。α係数は，順に.89，.86であった。また，基本的信頼感尺度に対して因子分析（主因子解－Promax回転）を行った結果，固有値の減衰状況から2因子解を最適解とし，基本的信頼感と対人的信頼感を抽出した（谷，1996；1998）。α係数は順に.83，.72であった。また，個人志向性・社会志向性尺度に対して因子分析（主因子解－Promax回転）を行った結果，固有値の減衰状況から2因子解を最適解とし，社会志向性と個人志向性を抽出した（伊藤，1993）。α係数は順に.75，.77であった。各測定尺度とも十分な内的整合性が確認されたため，以下の分析では全尺度を使用することとした。

対人恐怖心性と自己関係づけの関係性

一般青年における対人恐怖心性と自己関係づけの関連性を検討するため，対自的不安意識と対他的不安意識および自己関係づけの合計3変数を投入変数とするクラスター分析（Ward法－平方ユークリッド距離）を行った。その結果，解釈可能と思われる4クラスターを抽出した。そして，各クラスターを構成する3投入変数の平均値について多変量分散分析を行った結果，群間の差を示すWilksのラムダは有意であったため（$\Lambda=.45$　$p<.05$），各変数で個別に分散分析を行った。その結果，3変数全てに有意な主効果が見られたため多重比較（Tukey法）を行った（対他的不安意識：$F_{(3,301)}=236.4$ $p<.05$：【1＜4＜3＜2】，対自的不安意識：$F_{(3,301)}=185.7$ $p<.05$：【1＜3≒4＜2】，自己関係づけ：$F_{(3,301)}=145.6$ $p<.05$：【1＜2，1＜4，3＜2，3＜4】）。

また，3投入変数を標準化得点に変換して再度平均値を求め，その数値を含めて4クラスターの特徴を表したものをFigure 2に示した。Figure 2に見られるように，第1クラスター（$n=78$）は，対他的・対自的不安意識と自己関係づけが全て低く，社会場面での過度の緊張や自分を統制できない不安が低く，他者行動を自己に否定的に関係づける特性が低い群であった。また，第2クラスター（$n=81$）は対他的・対自的不安意識と自己関係づけが全

て高く，社会場面での不安意識が強く，自分を統制する力も弱い上に，他者の何気な無い所作を独断で自己に関係づける被害的認知が強い群であった。また，第3クラスター（n=75）は対他的不安意識が高く，対自的不安意識は平均水準で，自己関係づけが低く，社会場面での緊張を意識する傾向にあるものの，自分を統制する力をある程度保有しており，他者視線に振り回されることが少ない群であった。そして，第4クラスター（n=71）は対他的不安意識が低く，対自的不安意識は平均水準であるが，自己関係づけのみが高く，社会場面における緊張は低い一方で，他者行動を否定的に認知しやすい群であった。

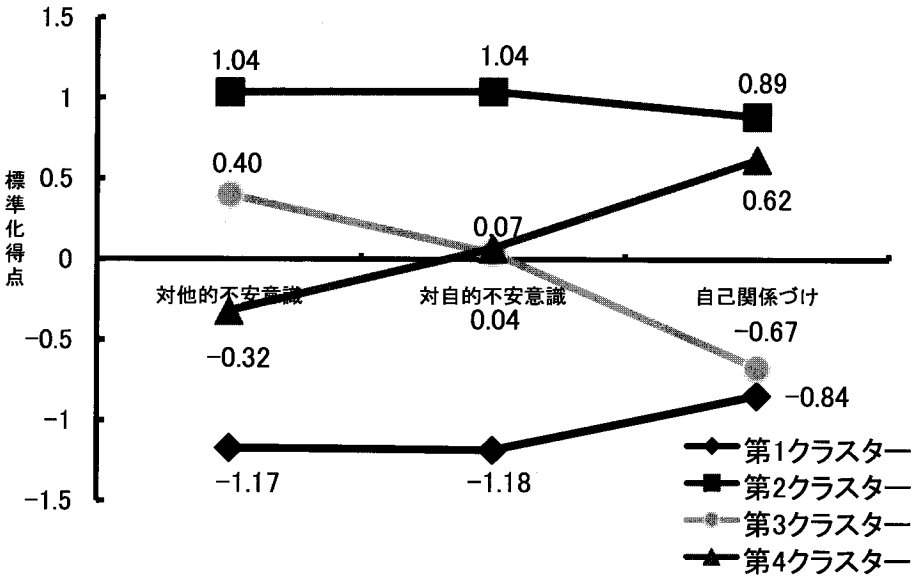


Figure 2. 各クラスターの投入変数の平均値

Table 1 各クラスターにおける関連要因の分散分析結果

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	第4クラスター	
人数，人数比率 男女比	n=78,25.6% (35：43)	n=81,26.5% (29：52)	n=75,24.6% (33：42)	n=71,23.3% (24：47)	F-Value 多重比較（Tukey法）
公的自意識	46.14 (10.62)	59.33 (7.60)	47.89 (9.59)	54.87 (8.55)	35.33* 1≒3<4<2
私的自意識	49.88 (10.31)	48.09 (7.95)	45.17 (9.36)	47.06 (9.06)	3.51* 3<1
対人的信頼感	26.77 (4.48)	23.84 (4.05)	23.76 (4.62)	25.58 (4.04)	8.85* 2≒3<1
基本的信頼感	30.36 (6.11)	19.02 (4.92)	24.21 (5.44)	23.11 (5.94)	55.18* 2<4≒3<1
社会志向性	30.50 (4.30)	28.10 (4.65)	27.57 (4.41)	30.11 (3.80)	8.61* 3≒2<1≒4
個人志向性	31.95 (5.35)	25.51 (4.67)	28.12 (4.81)	28.08 (4.28)	24.16* 2<4≒3<1

上段は平均値，下段は標準偏差　　*p<.05

4クラスターにおける自意識・適応状態の関連

先ほど抽出した4クラスターにおける自意識や適応状態を明らかにするため，4クラスターを独立変数として，公的自意識・私的自意識・対人的信頼感・基本的信頼感・社会志向性・個人志向性の6変数を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果，群間の差を示すWilksのラムダが有意であったため（$\Lambda = .45$　$p < .05$），各変数で個別に分散分析を行い，全ての変数に有意な主効果が見られた。多重比較（Tukey法）を行い，結果をTable 1に示した。更に，各特徴を視覚的に捉えやすくするため，各従属変数を標準化得点に変換した上で再度求めた平均値をFigure 3に示した。以下にて，各クラスターにおける自意識および適応状態の結果から見られる様相について考察を行った。

考　　察

第1クラスター（対人不安意識・自己関係づけが低い群）

Figure 3より第1クラスターは，公的自意識が低く，私的自意識が高く，対人的信頼感・基本的信頼感，社会志向性・個人志向性の適応性が最も高い群である。これは，他者観点に立った場合の視線感度が低く，むしろ自分自身に向ける視線意識が強いことを示し，他者や自分自身に対する強い適応観を持つことで，対人不安意識や何気ない他者行動に対する被害的認知を強めることが少ない自己の安定性を持つ様相が示唆される。

岡田（2002）は対人恐怖心性が低く，自己―他者関係性に敏感でない青年群について触れている。そして，その群の特徴について友人関係のとり方が多人数で群れる傾向が強いこと，相手に対する気遣いが少ないことを指摘している。また，清水・川邊・海塚（2007）では，対人恐怖心性が低く，自己愛傾向が高い群が適応性の高さを示し，他者視線に対する閾値の

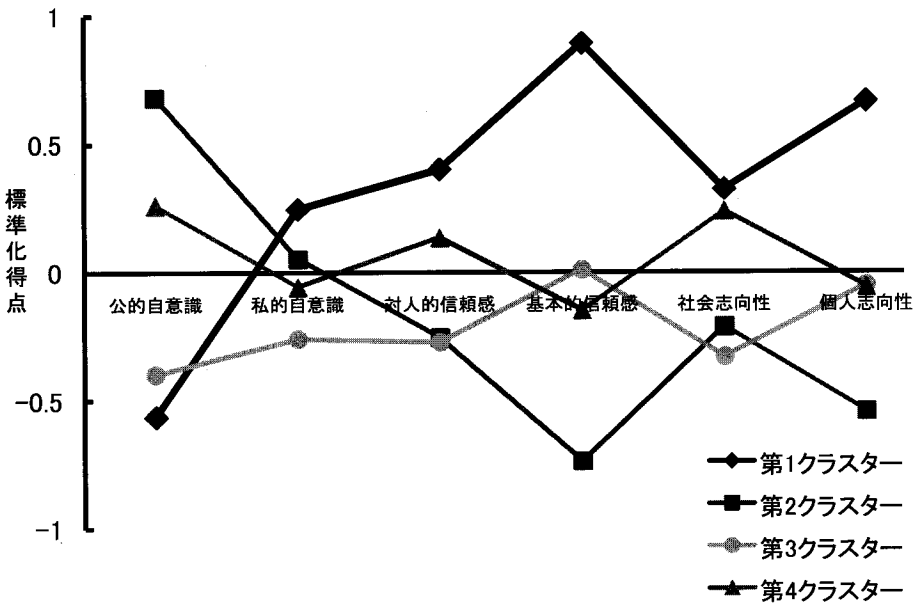


Figure 3.　各クラスターの従属変数の平均値

高さと自分への意識の強さが見られることが示唆されている。これらの知見は，本クラスターに類似するものと思われ，他者視点から見た自己像よりも自己そのものへの意識が強いため，対人関係についての不安意識は低く，他者配慮性に欠ける可能性を含みながらも，広く浅い友人関係の中で自己世界の安定を保っていることが考えられる。しかし，同時に自己中心的な側面の強さも推測されるため，誰とでも友人関係が円滑に保てるとは考えにくく，とりわけ対人的過敏性の強い青年群にとっては近寄り難い印象を持たせることも想定される。

第2クラスター（対人不安意識・自己関係づけが高い群）

Figure 3より第2クラスターは，公的自意識が最も高く，私的自意識は平均水準にある。そして，適応性は全般に低く不適応的な状態像を示している。特に相対的ではあるものの対自的側面に関連する適応性の低さから，自分自身に対する自信の欠如が見て取れる。これは，他者観点に立った場合の視線感度が強いために対人不安意識や他者行動に対する被害的認知を強めている自己の安定性を欠いた様相が示唆される。

山田（1983）は自意識過剰状態を青年期の未熟性を規定するものであると指摘しており，集団内で安定するためには自己に対する“見る立場”と“見られる立場”の適切なバランスが重要であると述べている。特に“見られる立場”を指す公的自意識のみに囚われてしまうことが，対人敏感性を増大させ，他者行動を自分の否定的評価に結びつける傾向に関連するとしている。これは，笠原（2005）が指摘する確信型対人恐怖を想像させるものであり，強い対人恐怖心性を持ちながら，何でもない他者行動に敏感に反応してしまい，確たる証拠もないのに自己に対して被害的認知を高める点において一致を見せており，適応性も全般的に低いことから見ても青年期危機的な状況にあるものと解釈される。

また，山田（1983）は自己臭・自己視線恐怖の特徴を，現実の臭いや視線に対する他者反応を冷静に判断するための主体性消失，証拠もないところでの他者行動の悪意的解読の現象にあるとし，これは本人の“他者に対する強い敵意感”が顕在化したもので，自己主体性・他者との相互信頼感が強く歪んだ状態であるとしている。

本クラスターは，これらに類似する様相を呈しており，自意識のバランスの悪さや自己―他者関係の適応における未成熟さによって，友人関係においても常に他者に対する気遣いに追われ（岡田，2002），自分自身の適応性を狭めていることが考えられる。

第3クラスター（対他的不安意識が高く，自己関係づけが低い群）

Figure 3より第3クラスターは，自意識が共に低く，対人的信頼感・社会志向性は低いが，基本的信頼感・個人志向性は平均水準を示していた。

岡田（1993）は，対人的場面で円滑に振舞えない等の高い不安意識の割には他者の目に映った自分への関心は低く，自分自身の内面的な不安をさほど感知していない群について触れている。この一群は，対人関係を維持しようとする傾向が低く，他者関係そのものから退却しやすいことが指摘されており，山田（1989；2002）の“顔見知り関係”から“親密な関係”に発展する場面にて困難性を示し，それゆえ情緒的な深まりを欠いた人間関係にとどまりやすい“ふれあい恐怖”とも関連付けられている。これは，他者との情緒的関係が深まる可能性のない状況では支障をきたさないことを示すものであり，他者視線からあらかじめ距

離を置いたところでは安定しているものと考えられている。また，これに関連して岡田（2002）は，本現象は大学生において顕著に見られ，公的場面や初対面の関係性よりも心理的に近い他者との関係性において弱さを示し，友人関係も相手の内面にはほとんど触れることがない特徴を持つとしている。

これは，本クラスターと類似性を持つものであり，基本的信頼感・個人志向性との対自的側面における適応性が平均水準にあるために，一見すると安定しているようにも見える。しかし，相対的ではありながらも，対人的信頼感・社会志向性の対他的側面における適応性の低さに見られるように，他者を完全には信頼することができず，社会的存在としての自己定位が不完全であるために，対人状況に一抹の不安を持たざるを得ない状態像を思わせるものでもある。

第4クラスター（対他的不安意識が低く，自己関係づけが高い群）

Figure 3より第4クラスターは，公的自意識が強く，私的自意識は平均水準にあり，適応性は全般的に平均水準を示していた。

岡田（1993）は一定の適応性を持ちながらも，他者からの視線・評価に対して敏感な一群について，彼らを周囲に嫌われないように必死で気を遣い，相手と精神的に深く関わることよりも，表面的に楽しく関わることを重視する“群れたがり”と解釈している。本クラスターはFigure 3に示されるように，見られている自分に敏感であり，相対的には対他的側面のほうがやや優勢ではありながらも，対自的・対他的な適応性はほぼ平均水準を示している。ただ，社会志向性はエゴグラム（TEG）との関連において，自由な奔放性を表すFC（Free Child）とは無相関で，他者への遠慮や自己抑制を表すAC（Adapted Child）と正の相関を示すことから考えると，社会規範的で協調性に富む一方で幾分，集団内にて遠慮がちになる特性でもある（伊藤，1993）。

この点を考慮すると，岡田（1993）における一群は，本クラスターの様相に類似性を有するものと考えられる。また，岡田（2002）は他者との関係不安に敏感である青年は，友人関係の持ち方の特徴として集団を形成したがると同時に，気遣いも強く“葛藤を感じることなく群れる”というよりは“自己を防衛するために群れる”との関係を形成すると述べている。このことから考えても，本クラスターは，常に他者から否定的に見られないようにある程度自分を押し殺しながらも相手に合わせることを重要視している群であるとも考えられる。

ま と め

本研究は対人恐怖心性と自己関係づけの関連性を検討するため，クラスター分析によって4クラスターを抽出し，各クラスターの様相を公的自意識・私的自意識・基本的信頼感・対人的信頼感・個人志向性・社会志向性と併せて検討することにより，現代の青年期心性に対する知見の積み重ねを行ったものである。

各クラスターの様相をまとめると第1クラスターは，対人恐怖心性・自己関係づけが共に低く，対人不安意識や妄想的観念とは無縁であり，自己に対する意識の強さと高い適応性を特徴としながら，同時にやや自己中心的な特性を持つ可能性が推測された。第2クラスター

は，対人恐怖心性・自己関係づけが共に高く，不適応的な状態像を示し，他者から見られる意識に振り回され，自己信頼，他者信頼が共に低いために常に対人場面での緊張を強く持ち，他者行動を自己の被害的側面に結びつける未熟性を持つことが示唆された。第3クラスターは，対他的不安意識は高いが自己関係づけが低く，他者との親密な関係を築くことを苦手とする“ふれあい恐怖”に類似した群であると考えられた。自己に一定の信頼感を持つことで対人不安意識が抑えられている反面，他者信頼感に弱さを持つため，対人状況で一抹の不安を持ち続けていることが示唆された。第4クラスターは，対他的不安意識は低いが自己関係づけが高く，自己を防衛するために集団内で同調しており，表面的には安定しているようにも見えるものの，周囲から嫌われないように遠慮する傾向を有し，他者行動を敏感に察知せざるを得ないことが示唆された。

本研究の結果は，探索的立場にある点においての限界を有しながらも，現代青年における自己一他者関係距離の中で対人不安意識・被害的認知の一端を明らかにしたものである。今後は，学生相談場面への有効な資料が提示できるように，“個”—“関係”葛藤様式や，家族関係等の関連を含めた視点から更に知見を積み重ねることが課題であると思われる。

引用文献

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition Revised* : DSM-Ⅳ-TR. Washington, DC : Author.
（アメリカ精神医学会　高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）(2002). DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の分類と診断の手引　医学書院）

朝倉聡（2000）. 対人恐怖/社会恐怖の薬物療法　臨床精神医学，**29**，1121-1128.

Fenigstein, A., & Vanable, P. A. (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 129-138.

堀井俊章・小川捷之（1997a）. 青年期における対人不安意識の発達的変化　心理臨床学研究，**14**，448-455.

堀井俊章・小川捷之（1997b）. 対人恐怖心性尺度の作成（続報）　上智大学心理学年報，**21**，43-51.

伊藤美奈子（1993）. 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究，**64**，115-122.

金子一史（2000）. 青年期心性としての自己関係づけ　教育心理学研究，**48**，473-480.

金子一史・本城秀次・高村咲子（2003）. 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連　パーソナリティ研究，**12**，2-13.

笠原嘉（1972）. 正視恐怖・体臭恐怖　医学書院

笠原敏彦（2005）. 対人恐怖と社会不安障害　—診断と治療の指針—　金剛出版

Leary, M. R. (1983). Social anxiousness : the construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 66-75.

Mattick, R. P. & Clarke, J. C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy,* **36**, 455-470.

森本幸子・丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨（2002）. 被害妄想的観念の発生に関する素因ストレスモデルの検討　性格心理学研究，**11**，2-11.

森本幸子・丹野義彦（2004）．大学生における被害妄想的観念に関する研究　―素因ストレスモデルを用いて―　心理学研究，**75**，118-124．
永井撤（1994）．対人恐怖の心理　―対人関係の悩みの分析―　サイエンス社
岡田努（1993）．現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係　発達心理学研究，**4**，162-170．
岡田努（2002）．現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究，**10**，69-84．
清水健司（2001）．青年期における対人恐怖心性と孤独感との関連　心理臨床学研究，**19**，525-534．
清水健司・海塚敏郎（2002）．青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連　教育心理学研究，**50**，54-64．
清水健司・川邊浩史・海塚敏郎（2005）．青年期における対人恐怖心性と第2の分離個体化の関連について　心理臨床学研究，**23**，579-590．
清水健司・川邊浩史・海塚敏郎（2007）．青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について　心理学研究，**78**，9-16．
菅原健介（1984）．自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み　心理学研究，**55**，184-188．
谷　冬彦（1996）．基本的信頼感尺度の作成　日本心理学会第60回大会発表論文集，310
谷　冬彦（1998）．青年期における基本的信頼感と時間的展望　発達心理学研究，**9**，35-44．
丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典（2000）．妄想的観念の主題を測定する尺度の作成　心理学研究，**71**，379-386．
山田和夫（1983）．成熟拒否　―おとなになれない青年たち―　新曜社
山田和夫（1989）．境界例の周辺：サブクリニカルな問題性格群　季刊精神療法，**15**，350-360．
山田和夫（2002）．「ふれあい」を恐れる心理　亜紀書房

（2008年10月31日受理，11月18日掲載承認）